幼保系養成校における
総合的カリキュラムに関する成果と課題
―本学保育コースの取組―

白　樫　静　枝・金　戸　清　高
井　﨑　美　代・水　町　　愛

Some Results and Problems from the General Curriculum in a Training School for Childcare Workers and Kindergartners: Implementation in the Child Care Course of KLC

Shizue Shiragashi, Kiyotaka Kaneto, Miyo Izaki, Ai Mizumachi

１．はじめに

「今どういう人材が必要なのか」と問われたら…社会の変化に対応できる専門的知識技能を習得していることに加えて、人間的な豊かさ、コミュニケーション力、共育力の有無などあげればきりがない。

そこで、大学での学びを豊かなものにし、社会に役立つ保育士を育成するためにカリキュラム編成を工夫することによって、系統的で継続的な学修を実現できるのではないかと考えた。具体的には学びの過程や結果を可視化し、学生が意欲的に取り組める環境や基盤を創造する。また、総合的な学修体験を多く取り入れ、学びの喜びを実感することで主体的な学修への転換を図る方法を試みることにした。

保育コースでは、保育者像を学生とともに探りながら、学生とより良い関係を築き、一人ひとりの教師の特性をティームティーチングの場に生かすことを前提にした。そして、その教育方法を各教員の共通理解のもと、効果的な教育の可能性を探っていくことにした。また、少人数における本学での教育の効果も同時に探ってみた。

２．仮説

本研究を進めるにあたり、以下の仮説をたてた。

(1)　仮説Ⅰ

各教科の関連性、独自性、系統性を考慮した教科の位置づけと各教師の特性を生かしたカリキュラムの創意・工夫により専門的で継続性のある学修の発展が期待できるのではないか。

(2)　仮説Ⅱ

教育課程を編成する際、教科を総合的に関連させ、学ぶ道筋を自分なりに可視化できたならば、学生が主体的に学習に取組むことができるのではないか。

３．仮説の検証

(1)　カリキュラム編成の考え方について

１）旧カリキュラムについて

図１は旧カリキュラム編成時の考え方を示したものである。各教科それぞれの「独自性」を重視し、「学びを総合的に成就させるのは学生自身である」という考えのもとにカリキュラムを編成した。

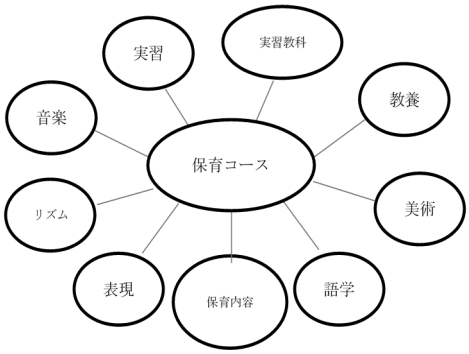

図１　旧カリキュラム編成時の考え方

〈課題〉

①　各教員の各教科等における学生への関わりは十分であったと思われるが、養成校としての学生育成としては、共通理解の上にたっての全体的な見通しをもった関わりには課題が残った。

２）新カリキュラムについて

図２は新カリキュラム編成時の考え方を示したものである。「フレッシュマン・ゼミⅠ」、「フレッシュマン・ゼミⅡ」(2014年度より「チャイルドケア・ゼミ」に名称変更)、「保育の表現技術」、「保育実践演習」の５科目６コマを保育コース教員全員で担当する科目として設定し取り組んだ。その際、音楽は上記関連科目の基盤と考えた。

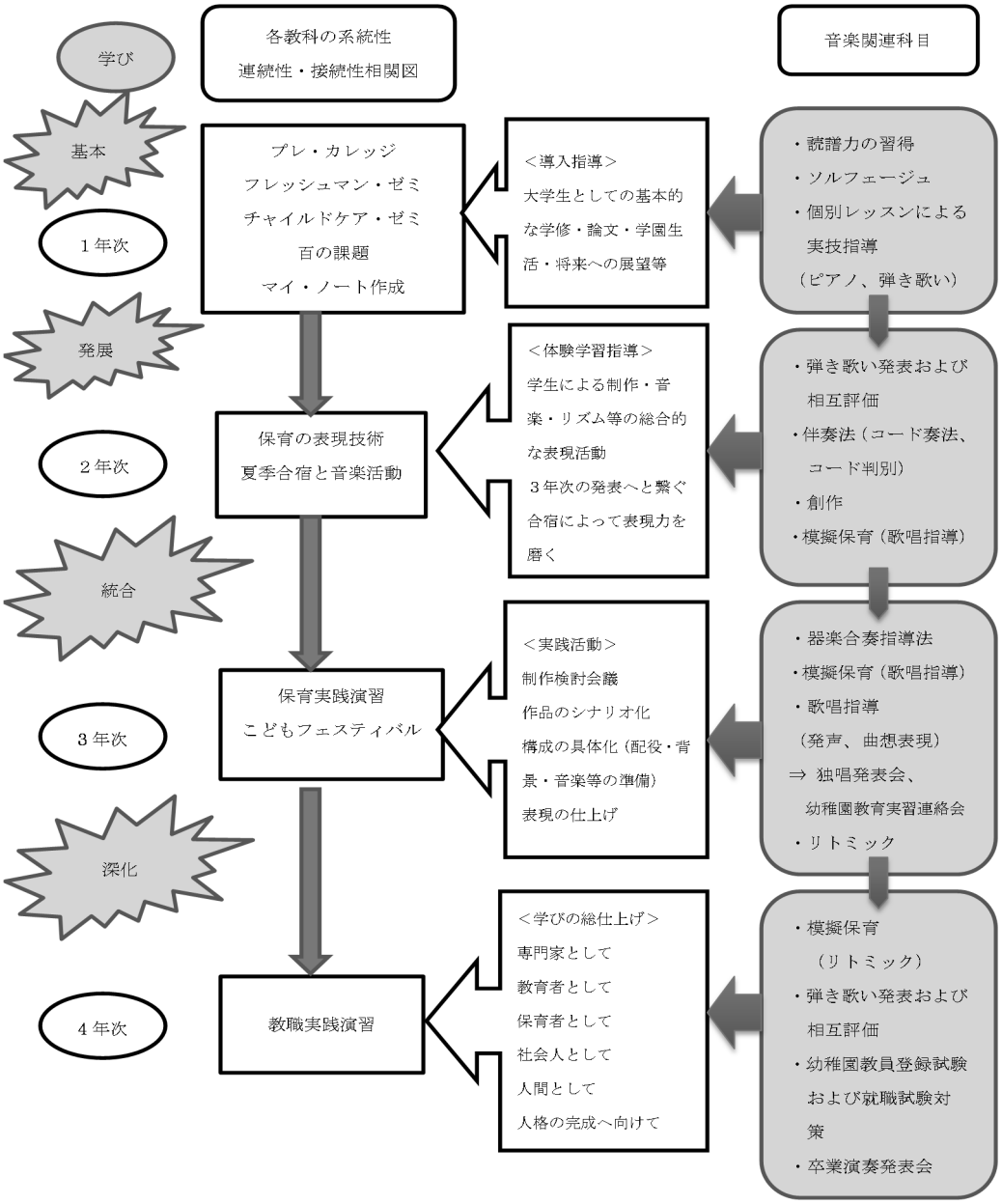

図２　新カリキュラム編成時の考え方

(2)　系統性を考慮しながら４年間を見通した総合的カリキュラム編成による授業の実践例

１）プレ・カレッジ

プレ・カレッジとは、推薦入試合格者を対象として実施される入学前教育である。その際、コース課題（読書課題、ピアノ課題等）を提示し、入学までの期間を充実させ入学後の学びに繋げる取り組みを実施している。

〈成果〉

① 大学に入学するという意識の涵養に繋がった。

② 高校から大学入学までの時間・空間を有意義に過ごせた。

〈課題〉

① プレ・カレッジからの学びの連続性が一部の学生（推薦入試合格者）にとどまり、入学時における意識や準備に差が生じた。

２）入学後の学修支援

入学式後３日間を使って行われる各オリエンテーションおよびフレッシュマンキャンプにおいて、履修指導を行っている。

〈成果〉

① 学生の履修登録がスムーズに、かつ新入生の自主的で効果的な履修計画がたてられるようになった。

３）フレッシュマン・ゼミ（チャイルドケア・ゼミを含む）（１年次生）

フレッシュマン・ゼミは、１年次の前期に新入生の学びの導入教育として、大学で学ぶ基礎的・基本的な学びの土台作りをする科目である。また、チャイルドケア・ゼミは、保育者としての学びの導入として、外部講師による講話などを中心にしながら１年次後期に実施する科目である。この２科目による学びを通して、養成校の学生としての意識や自覚を高め、学問の追求と人格の陶冶を目指す。さらに、社会の一員としての人格形成の基礎を培うことを鑑みてシラバスを組んだ。

図３はそれぞれの主な内容について示したものである。

（2012年度）

フレッシュマン・ゼミⅠ		フレッシュマン・ゼミⅡ
制作（こいのぼり）		保育者としての資質向上に向けた学び
講話	大学で学んできてほしいことなど	課題発表
	パペットを使った表現	アドバイザーグループ別面接
	人権学習	
	求められる人材	

（2013年度）

フレッシュマン・ゼミ		チャイルドケア・ゼミ
ノートの取り方		課題発表
テキストの読み方	講話	幼児教育について
レポート論文の書き方		求められる人材
レジュメの作り方		認定こども園について
発表の仕方		先輩による体験談

図３　主な内容

〈工夫点〉

① フレッシュマン・ゼミでは、大学での学びの基本姿勢を育成する講座を第１回目におき、その後折に触れて保育者としての資質を養うための講話、たとえば戦争を経験した教員による平和教育等を実施した。また、夏休みの過ごし方の諸注意など、本学が養成校として学生に課すべき指導を行った。

② 自学自習の精神の養成および卒業論文への繋がりを意識した「百の課題」研究の成果を発表した。また、「マイ・ノート」大会を実施し、ノートテイクの成果を確かめた。

〈成果〉

① 学びの振り返りとして小レポート作成に毎時間取り組んだことにより、学生の文章作成力が格段に向上した。

② 外来講師からの学生の受講態度に対する評価は良好であった。

③ 導入教育は学生の実態を踏まえ課題を改善することによって学修の効果を上げてきた。

〈課題〉

① 2014年度から本学のカリキュラムが大幅に変更された。年間に履修できる単位の上限が60単位から49単位に制限されたことにより、前年度まで保育コースで履修を推奨していた選択科目（「日本語文章表現法Ⅰ」および「Ⅱ」）の履修が不可能になった。そのため、フレッシュマン・ゼミでの指導内容をさらに充実させる必要性が出てきた。

４）保育の表現技術（２年次生）

保育の表現技術とは、保育内容を理解し、幼児期の子どもたちに必要な絵画・デザイン・彫塑・音楽・身体表現・リズム・言語表現等の知識や技術を総合的に習得し、保育の現場で実際に活用できる力を養成することを目的とした科目である。

〈工夫点〉

① １年次で学んだ学問の基礎的な技量や考え方、取り組み方などを、２年次の表現活動へと繋げた。特に発表力やプレゼンテーションの仕方などを表現活動に生かし、技術に裏付けられた創造的で感性豊かな活動を展開した。そのためにカリキュラムを工夫し、子どものための表現活動を展開する力量をつけるべく創意・工夫を重ねた。

② 図４は保育の表現技術における学びの変遷について示したものである。2013年度の課題を踏まえ、より学生が主体的に関われるように教材や素材の工夫をした。また、子どもたちの発達段階等に目を向けながらグループおよび個人での作品に生きるよう創意工夫した。さらに総合的な学修への発展を期してシラバス作成を工夫した。

〈成果〉

① 壁面構成に対する学生の認識が変化し、保育環境としての重要さに気づき、より子どもの気持ちを大切にした作品に仕上げることができるようになった。

② 作品に動きが出てくると同時に、平面だけでなく立体的な作品へと創意工夫できるようになった。

③ 制約された時間の中で､協力をしながら効率よく作品を仕上げることができるようになった。

〈課題〉

① 得意な分野を生かす役割分担はできるようになってきたが、苦手な分野の技術を習得する時間にはなりえなかった。

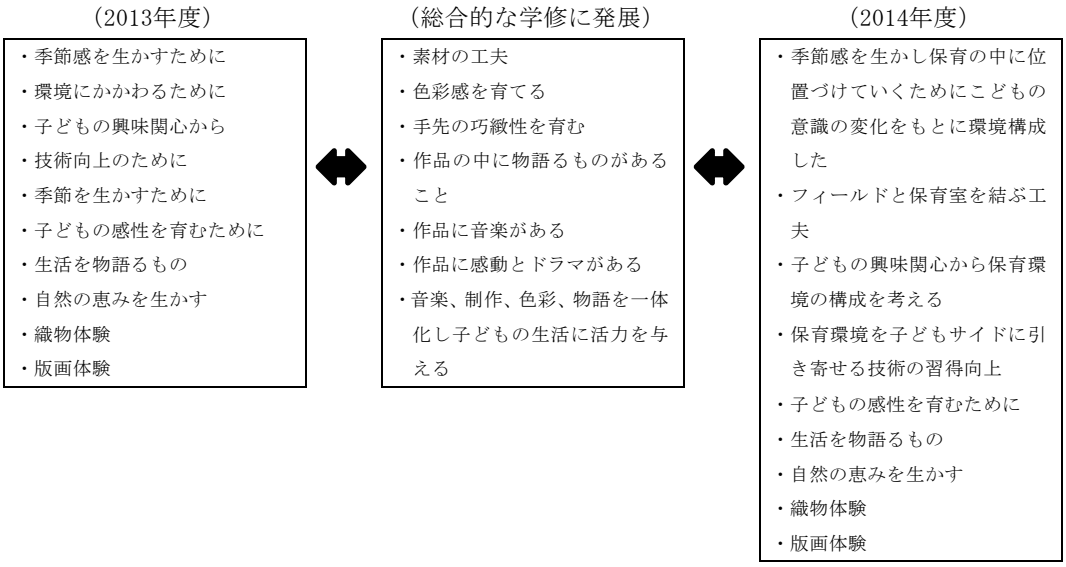

図４　保育の表現技術の内容の工夫

５）夏季合宿（２年次生）

保育コースにおける体験学習として、夏季合宿（２泊３日）を実施している。砂浜での造形やオペレッタ制作を通して保育者としての資質を高めるとともに、集団生活の体験によって、チームとして動くことの意義と心構えや保育者を目指す本学こども専攻学生の結束を図ることを目的としている。

〈工夫点〉

①　学びの連続性という観点から、実施学年を１年から２年に変更（2014年度）した。

〈成果〉

①　１年次のフレッシュマン・ゼミにおける基礎学力・技能充実のための時間の確保ができた。

②　夏季合宿事前準備の時間が充実した。

③　実技・演習科目の学びの実績の少ない１年次から、２年次に変更したことによる授業と連携した実践（体験）の場としての充実が図れた。

④　夏季合宿での体験を、保育実践演習（３年前期）の学びを踏まえたこどもフェスティバルでの実践発表に効率よく繋ぐことができた。

６）保育実践演習（３年次生）

保育実践演習は、これまでの保育に関する学び等を踏まえ、保育者として必要な知識技能を習得したことを確認し、保育実習や学修に生かすことを目的とした科目である。特に、本学では保育の表現技術、夏季合宿と保育実践演習を関連付けて、ティームティーチングにより実施していることが特色である。具体的には、こどもフェスティバル（３年次11月）に向けた企画や準備、ディスカッション等を含むグループでの活動、創作活動、表現活動に取り組む科目である。なおこどもフェスティバルの目的および趣旨は次の通りである。

こどもフェスティバルは、１年次のフレッシュマン・ゼミ、チャイルドケア・ゼミにて保育者になるための学びの基礎をもとに、２年次の専門的学修に繋ぐ。２年次では保育者に必要とされる専門的な表現・技術を、体験を通して学ぶ。その学修をより豊かなものにするために夏季合宿を実施し、広い学びを修得する。さらに人間的な成長に裏打ちされた、１・２年次で学んだ知識や技能を生かして総合学習の総仕上げとしてのフェスティバルを実施する。

こどもフェスティバルでは学生一人ひとりがプロデューサーであり、ディレクターであり、アクターであるという基盤にたって物語、音楽、脚本、衣装、小道具、大道具等すべて学生自身の発想と製作による運営をしていく。連続性をもたせた学びの集大成であり、学生自身が学びの結果を可視化できる教科統合の実践として計画した。その際、教師はあくまでも補助役に徹し、学生の発想、創意工夫を妨げないように共通理解をした。

〈工夫点〉

図５は、こどもフェスティバルの主担当学年である３年次生のティームティーチングで実施している科目、および体験学習の取り組みの変遷を示したものである。

① ティームティーチングによる科目は保育コース教員全員で担当したが、科目担当責任者とこどもフェスティバル実行委員長（コース主任)、各グループアドバイザーに変更した。

② こどもフェスティバルに向けた取り組みは、授業以外の時間を使用して学生と教員がともに行った。2013年度からは保育コース３年生より保育実践演習を効果的に活用した。

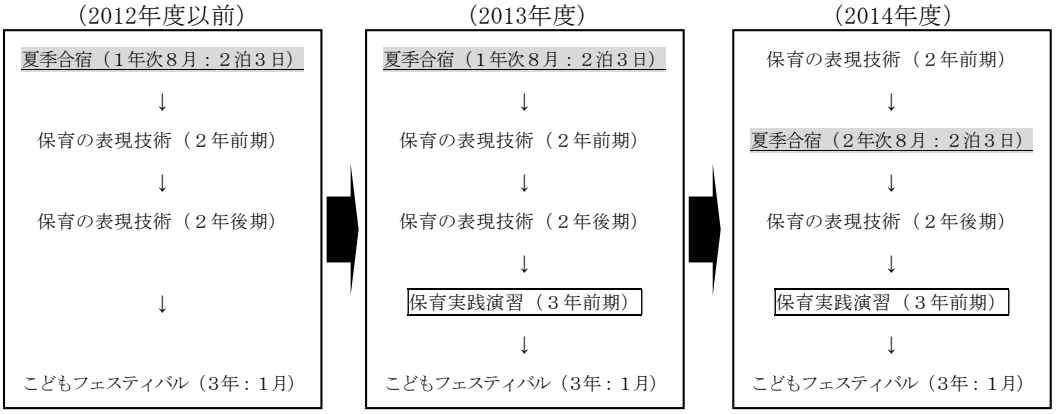

図５　こどもフェスティバル主担当３年生の学びの変遷

〈成果〉

① こどもフェスティバルに向けた取り組みを、授業と関連付けて実施したことで、より総合的な取り組みとなった。

② 役割分担を明確化したことにより、グループ別での活動の活性化に繋がった。

③ 少人数教育の基盤となる学生グループの窓口としてのアドバイザーの役割が明確化した。特に授業時間外での取り組みを含め、学生にとっては継続した支援体制がより整ったのではないかと思われる。

〈課題〉

① こどもフェスティバルに向けての取り組みについては保育コース全教員が対応することになっているが、保育実践演習の科目担当者と非担当者との情報の共有が十分ではなかった。こどもフェスティバルに向けた取り組みに差が生じないような役割分担の明確化と進行状況の周知がさらに必要ではないかと思われる。

７）音楽関連科目（１～４年次生）

〈音楽関連科目について〉

本学では、資格必修科目である「音楽」および「器楽Ⅰ」、「器楽Ⅱ」のほかに、独自開講科目として「器楽Ⅲ」、「器楽Ⅳ」、「器楽Ⅴ」の科目を設けている（2011年度より）。また、技能習得の徹底と実践力を身につける目的のもと、学生が入学から卒業（就職）まで継続的に音楽を学ぶ環境を整えている。さらに、保育活動に必要とされる技能や表現について総合的に学ぶ科目である「保育の表現技術」（２年次通年）の科目の内容から音楽にまつわる学習内容を抜き出し、これらを「器楽Ⅲ」（２年次通年）や「器楽Ⅳ」（３年次通年）の中で扱うことで、他分野の学びを充実させることにも繋げている。同時に、夏季合宿やこどもフェスティバルに向けた取り組みに必要かつ関連付けた学びも、これらの科目の中で扱っている。

〈音楽関連科目の流れと体験学習との関連について〉

音楽関連科目の学年を追った流れと、体験学習との関連について述べる。

① １年次

主に資格必修科目を履修し、内容としても理論および技能習得の基礎を扱うものとなっている。「音楽」（前期）では読譜とソルフェージュを扱い、これと並行して「器楽Ⅰ」（前期）および「器楽Ⅱ」（後期）では個々のレベルに応じた個別の実技指導を行う。これらの科目は相互に関連をもたせ、理論と実技を行き来しながら読譜力の習得を目指す。なお、ピアノ実技については、バイエル修了程度以上を目標到達点としている。

② ２年次

「器楽Ⅲ」（通年）の科目を通して、保育実践に繋がる応用力を身につけるための学びに取り組む。少人数集団での学び合いを生かし、人前で弾き歌い発表を行う機会を多く設け、それを学生が相互評価することで、人前での立ち居振る舞いや自己表現についてなど、客観的な視点から気付きをもつ目を育てる。

また、前期の後半ではコード伴奏法を習得させるとともに、これを応用した簡単な作曲法について扱う。これは、２年次の夏に行う夏季合宿でのオペレッタ制作に関連付けるものである。「器楽Ⅲ」の後半は、実習に向けた実践力を身につけるため、歌唱教材を扱った模擬保育に取り組む。

③ ３年次

「器楽Ⅳ」（通年）の科目を通して実践力をさらに磨くとともに、２つに分けた少人数クラスで開講することにより、個々に抱える課題に対する指導の徹底を図る。「器楽Ⅳ」の前半では、歌唱指導に力を入れる。発声の基本的な訓練から、曲想表現の工夫などについて、合唱曲などを用いながら学ぶことから始める。また、歌唱発表会に向けて個別の課題の練習に取り組ませ、個人指導も行う。ここでの歌唱指導は、学生個々の弾き歌いのレベルを上げるとともに、３年

次11月に行うこどもフェスティバル（創作オペレッタ）の取り組みに繋げる。

「器楽Ⅳ」の後半では、器楽合奏指導法やリトミックについて扱う。

④　４年次

「器楽Ｖ」（通年）を通して、音楽を取り入れた保育実践に関する発展的な学びと、就職試験への対策を主に行う。前半は、リトミック活動を取り入れた模擬保育に取り組み、実践を振り返ってのディスカッションを行うなど、実践力を高めることに加え、研究的な視点で個々の考えを深めることをねらいとする。

また、就職試験に向けた実技指導にも力を入れ、演奏や歌唱の技能のみならず、様々な体験学習を通して学んだ表現力も生かしながら仕上げていく。さらに、この科目の最後では「卒業演奏発表会」を行い、独奏や弾き歌いなど、それぞれが選ぶ内容で４年間の学びの成果を発表する。また、これを下級生に鑑賞させ、学習の見通しを立てさせることをねらいとする。

〈成果〉

①　入学前課題を与えることにより､理論､実技ともに１年修了時の平均到達レベルが上がった。

②　１年次に読譜指導の徹底を図ることにより、技能習得の大きな妨げとなる読譜の難しさをある程度解消することができた。また、学生が未習曲にも自ら取り組めるようになるなど、自ら学ぼうとする力を伸ばすことにも繋がった。

③　２年前期後半で扱う内容を夏季合宿でのオペレッタ音楽づくりに応用する流れにしたことにより、理論の裏付けのもと実践に繋げることができた。

④　２年後期、絵本への音づけ（朗読劇）に取り組んだことを通して、音や音楽のもつ特性について学ぶと同時に、創作オペレッタにも活かされた。

⑤　オペレッタにおけるステージでの発音や発声の弱さを強化する目的で始めた３年次での歌唱指導と独唱発表会への取り組みは、学生各々が歌うことに自信をつけることにも繋がり、歌唱力や表現力の向上にも繋がった。

⑥　夏季合宿やこどもフェスティバルでのオペレッタ体験は､学生の表現力を磨くことに繋がり、それらは模擬保育の実践においても生かされていることを感じた。

〈課題〉

①　夏季合宿やオペレッタで音楽を担当する学生は例年音楽の得意な学生に偏る傾向にあり、それ以外の学生には、応用的な実践に挑戦する機会が少ない。

②　２年次生以上の学生には個人指導の時間を十分確保できない（４年次生の個人指導を優先している）ため、１年次に必要な力をつけられなかった学生に対するフォローが不足している。

③　苦手意識からくる音楽嫌いをゼロにしたいが、継続的な努力の習慣がつかない学生のモチベーションを高めることは難しい。

８）教職実践演習（４年次生）

教職実践演習は４年間の集大成を行う科目である。履修カルテを参照しながら教育・保育課程や実習を全体的に振り返り、教員として、保育士として求められる下記の４つのテーマについて各自の達成度や課題を洗い出し、不足していると思われる知識や技能を補い、保育者として働くための準備とする。なお、講義では毎回レポート提出を求めている。

〈教員として求められるテーマ〉

① 使命感や責任感、教育的愛情など

② 社会性や対人関係能力など

③ 幼児理解や学級経営など

④ 保育内容等の指導力など

〈工夫点〉

① 最終学習としての使命感や高い倫理観や規範意識をもった保育者として、それぞれで振り返る環境を醸成してみた。

② 学級経営の基本的なことや学級運営に必要な書類の作成の仕方にも触れるようにしてみた。

③ ４年間で学び足りなかったことも、個から全体に広げ、共通の課題として学びを深める工夫をした。

④ 前年度のシラバスを学生の実態から見直し、改善を試みた（図６参照）。

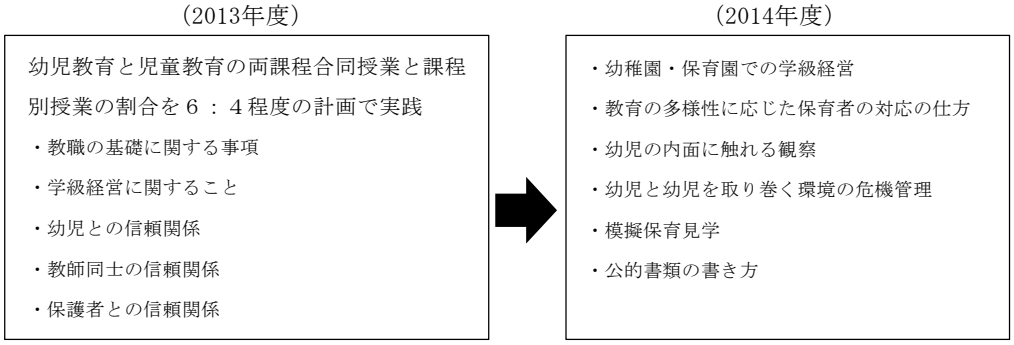

図６　教職実践演習の改善点

〈成果〉

前年度からの実施のため１回の成果と課題にとどまっている。

① 幼・小両課程同時の学習は、幼児教育と小学校教育について同時に学ぶことができた。

② 両課程の学生同士の繋がりが深くなった。

〈課題〉

① 幼・小両課程合同の学習は内容の違いから無理が生じた。

② 両課程の特色を生かした学習形態や内容が必要になった。

４．検証の結果

ここで先に掲げた仮説の検証をする。

(1)　仮説Ⅰの検証

①　科目の独自性を生かし、入学から卒業までの関連科目の総合的カリキュラムを開発したことで、学生が学びの道筋を可視化することで学習意欲が年ごとによくなってきた。

②　教員同士の連携により、学生同士の協力体制も充実し、学びの深化・発展に繋がった。

③　本学の教育課程編成によって教育的効果が可視化できるようになり、豊かな学びと学びの喜びが学生自身の生きる力に繋がって、学びを実感できるようになった。

④　各学年の教科の連続性と系統性を重視したことで意識の連続性、継続性、発展性がみられるようになった。

(2)　仮説Ⅱの検証

①　科目の関連性を図りながら連続性と発展性を志向した学びへの転換を図ることができた。

②　学生の授業記録・反省文や作品の発表、プレゼンテーション等を随時生かすことで学習が活発化した。

③　発表会、こどもフェスティバル、夏季合宿など、学生の意欲と主体性を育てる活動を取り入れたことで活動が活発になり成果に繋がった。

④　保育の現場で求められる総合的な力の基盤が創造性と共に育成されつつある。

⑤　学生による学びの深化は学生の意欲と研究、探究心を向上させている。

⑥　系統的で総合的な学修を目指したことにより、学びの過程を学生が把握し、自己や集団の学びの成果を確認できたことで自己肯定感や満足感に繋がり、充足感が得られるようになってきた。

(3)　全体の課題

検証の結果、以下の課題も残った。

①　学生主体の学修はともすれば授業の進度が遅れがちになるので、あらかじめ学生の学びの主体化を図っておく必要がある。

②　各教科の授業を通して、教員間の連携の在り方をさらに工夫する必要がある。

③　ティームティーチングの効果を上げるため担当者間で授業前の打ち合わせを十分にする必要がある。

④　各教員の専門性を生かした授業をどう構築するかによって、学びの成果が変わるということを共通理解できる仲間作りが大切だが、時間をかける必要がある

５．まとめ

本稿に掲載したカリキュラム編成の試みは2008年の「保育所保育指針」改訂告示を端緒とした保育士養成課程等検討会による「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」によって養成校にカリキュラム改編が求められたことから始まった。今回の改正のねらいは、「保育の質の向上」にあり、「保育所が子どもや子育て家庭を取り巻く今日的課題を踏まえ、保育の専門機関として地域社会に貢献することを求めて」のこととされる。つまりは、時代に即応した保育者しての「専門性」の向上が求められているのである。

カリキュラムの改編にあたっては、科目の名称や単位数の変更、科目の追加、実習科目の充実等様々なものがあったが、本コースが注目したのは「保育の表現技術」と「保育実践演習」であった。

「保育の表現技術」は従来の必修科目６系列のうち「基礎技能」が名称変更されたものである。「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要」とされていることを踏まえ、「音楽表現、造形表現、身体表現、言語表現」に関する「表現技術を保育との関連で修得できるようにする」ために、本コースでは「保育の表現技術」という通年４単位の科目を設定したのであった。

また「総合演習」から名称変更された「保育実践演習」については３年次の開講科目として学生による「こどもフェスティバル」の企画・実行とからめた保育の総合力の涵養という目標の達成への科目と位置づけたのである。

本学は小学校養成課程もあることから、「保育実践演習」と「教職実践演習」を併設しなければならなかった。「教職実践演習」は2013年度に開講された。小学校課程受講者とは、外来講師の講演などは適宜合同で受講することとなっていたが、開講後は幼保関係の独自の学びを重視した。

以上の2013年度までのカリキュラムの改編と実践により、冒頭に揚げた仮説の検証を行ったのだが、これまでの取り組みから、以上の結論を得た。しかしながらこれらの取り組みはまだ端緒にあるのであって、今後のＰＤＣＡサイクルにより更なる改編と充実が目指されるべきものである。